

## 回覧

令和 3 年 (2021 年) 度 第 二 回 定 例 役 員 会 2021 年 2 月 6 日 (土)

～2021 年 2 月 5 日 (金) 作成～

### < 館長報告 >

館長 土井 承夫 (どいよしお)

「福は内」「鬼は外」の掛け声を聴くだけで急に春になった様な気分になるのが不思議です。そして、梅一輪、一輪ほどの暖かさと申しますがまさしくその通りの気候ですね・・・皆様、お元気でしょうか？

さて、先月 1 月 25 日付けの回覧で「書面決済 総会議案書 承認可否投票の集計結果」についてお伝えしました。改めてその内容を簡潔にレビューします。

#### < 決済の規約上の根拠 >

まず、決済方法は「福庭自治公民館規約」の総則 (総会・役員会) 第 18 条に準拠して、「執行部一任」を「委任状」と見なし、全ての回答数が 全世帯 413 の過半数 207 以上であることを確認した上で、「承認と執行部一任」の合計が回答総数の過半数である事により決済成立する事としました。

その結果が以下とおりです。



#### < 集計結果 >

～回答期限の令和 3 年 1 月 16 日、第一回定例役員会時点の集計～  
< 令和 3 年 (2021 年) 度 福庭自治公民館 定期総会議案書 > の内容について

承認する	執行部に一任する	承認しない
133	98	2

(回答総数 : 233 )

< 「承認」と「執行部一任」の合計 >

< 承認しない >

231	2
-----	---

( 99.1 % )

( 0.9 % )

**依って、令和 3 年度 (2021 年度) 福庭自治公民館 定期総会議案書の内容は全て可決承認されました。 ありがとうございます。**

## <福庭自治公民館新築特別寄附金（自主的な寄附）の集計状況>

住民の皆様からの上記の自主的な寄附金の集計状況をこの後もこの館長報告でお伝えしていきます。受け付け窓口は館長の私、土井承夫です。（26-0770、携帯 080-4261-1979）お電話を下されば、私が戴きに参ります。

### <受付期限の延長>

この寄付金の受付期限を1年間延長し新公民館が完成する令和3年11月末日と致します。また新公民館完成後も様子を見ながら引き続き受け付け致します。

\*令和3年(2021年)1月31日(日)現在の集計結果(総計)は次の通りです。

(1) 寄付頂いた世帯数： 146世帯 (全体の約35.4%)

(2) 寄附金の合計： 465万円

(3) 個々の寄付金額の概要：最高額：30万円(1名) 30万円(福庭青年団) 25万円(2名：1名は福庭、もう1名は福庭以外の方です) 10万円(13名) 5万円(10名)、3万円(21名)、2万円(14名)、1万円(83名・内1名は福庭以外の方です)

## ～ 館長のちょっと一服コーナー ～

### N響「第九」ソリストに鳥取出身の声楽家 谷口 伸さん(51歳)が登場！

年末の風物詩として定着しているNHK交響楽団のベートーベン「第九」(だいく)演奏会に鳥取市出身の声楽家 谷口 伸(たにぐちしん)さんが昨年末、バリトン・ソリストとして出演された。鳥取県にとってこれは歴史的快挙だと思う。4年前の平成29年11月号のレポートで“年末は「第九」「紅白」「忠臣蔵」と題してお話ししましたが、今回はその「第九よもやま話」の第二弾です。

谷口さんは県立鳥取東高校から東京都内の音楽大学ではない総合大学の文学部に進学し合唱団に入ってバスのパートリーダーとして活躍したが、その在学中にあった毎日学生音楽コンクール東京大会で第2位に入賞し1位だったあの森麻季とは6ポイントの僅差だった。そして音大以外からの入賞は異例であった。平成5年に大学を卒業しNTTデータに就職するが、翌年退社しカワイ楽器 渋谷店でアルバイトをしながら声楽家としての道を歩んでいく。

そして次々と国内のコンクールで優秀な成績を納め、受験資格ギリギリの 29 歳で渡欧しウィーン国立音楽大学に合格、音楽の奨学金ロームミュージックファウンダーションの奨学生に選ばれる。その後は欧州とりわけドイツを中心に活躍していく事になる。

実は、第九ソリストを務めた鳥取県出身の声楽家は谷口さんが初めてではない。今年 80 歳になられる日本を代表するテノールの声楽家の一人、田口興輔(たぐちこうすけ)さんは鳥取県出身で県立境高校の卒業生だ。有名な方だが鳥取出身とは存じ上げなかったし、県民にもその事は広くは知られてはいないだろう。この辺がはがゆい。

今回の谷口さんの快挙をきっかけにもっと鳥取県出身の音楽家や芸術家の事を知り県内で行われる演奏会にソリストとしてお招きするような動きが活発になればいいと思う。

ところでここからは「第九」を含むクラシック音楽に纏(まつ)わる面白いお話を 4 年前のレポートと重複しない様にお届けします。

(1) 「第九」とは正式には「ベートーベン作曲 交響曲第 9 番ニ短調 作品 125」

です。第 9 番であることから「第九」と呼ばれるようになりました。

呉々もカーペンターの「大工」(デア〜ク)と発音しない様をお願いします。

(2) 合唱団はいつステージに入ってくるの? ・ ・ ・「県民による第九」 倉吉公演

をご覧になった方はお分かりでしょうが、第 2 楽章と第 3 楽章の間にステージ後方の段々状スペースの上に約 100 人近い合唱団が素早く登場します。ソリスト 4 人もこの時に入ります。然し、年末おおみそかに NHK で放映される前述した N 響の第九は、第 1 楽章の始まりから既に合唱団はステージに入っていてその段々の地べたに座って終楽章の歌の出番まで待っています。今ではこの NHK 交響楽団の第九だけが長年このスタイルを採っています。・・・何故でしょう? 決してその辺の根性論だけで決まっているのではありません。これには音楽的というか歌詞であるシラーの詩に唯一ベートーベンが書き加えた重要な一節の意味が理由になっています。

最終の第 4 楽章の合唱が始まる冒頭にバリトンの有名な独唱が響きます。それは「O Freunde nicht diese Töne! ・ ・ ・」(オー フロインデ ニヒト デイーゼテーネ! ・ ・ ・) つまり「おお友よ、このような音ではなく心地よい歓喜に満ちた歌を歌おう! ・ ・ ・」という意味です。「このような音」というのは第一から第三楽章の事と推測されますが、今までの音楽を否定しあのみんながよく知っている歌「晴れたる青空 ・ ・ ・ “ミミファソソファミレ” ・ ・ ・」の有名な旋律を引き出していくのです。ドイツ語の“ニヒト”(nicht)は英語の“ノット”(not)で否定する意味の単語です。

(3) これを踏まえて何故N響の年末の第九だけが最初から合唱団がステージに整列しているかを説明します。

(4) ヨーロッパの自家本元の“あるオーケストラ”も実は今から100年近く前から年末の大みそかの夕方に「第九」を演奏してきました。ですから第九を年末に演奏するのは日本だけで年末の総決算の雰囲気合っていると、オーケストラ団員の小遣い稼ぎのボーナスの様なものだという通説は本当は間違っています。4年前の私のレポートも間違いであります。申し訳ありません。

(5) 世界で一番古い歴史の長い交響楽団（オーケストラ）はどこでしょうか？それはヴィルヘルムフルトヴェングラーやヘルベルトフォンカラヤンのベルリンフィルではなく、カールベームやカルロスクライバーやレナードバーンスタインのウイーンフィルでもなく勿論、アメリカのブルーノワルター・コロンビア管やゲオルグショルティ・シカゴ管やユージンオーマンディ・フィラデルフィア管やジョージセル・クリーブランド管でもなく、それはドイツの首都ベルリンの南150キロの所にあるライプツィヒという町のライプツィヒ ゲバントハウス管弦楽団です。「ゲバントハウス」とは織物工場という意味で270年前のスタート時はその工場を改造したホールでした。その楽長の事をカペルマイスターといい特にこのオーケストラの楽長は“ゲバントハウスカペルマイスター”(Gewandhauskapellmeister)と呼ばれます。

この世界最古のライプツィヒ・ゲバントハウス管弦楽団が、第一次世界大戦が終わり平和を願う声が高まってきたドイツで今から約100年前の1918年から毎年年末大晦日の夕方5時頃から「第九」を演奏するようになりました。これが日本で始まったのが第二次世界大戦終結後の1947年（昭和22年）であります。現在のNHK交響楽団である当時の日本交響楽団により12月の3日連続の「第九コンサート」として行われました。

(6) N響の年末の第九だけが合唱団を最初からステージに整列させている理由・・・  
そのライプツィヒゲバントハウス管弦楽団の現在の楽長カペルマイスターでN響の一番偉い指揮者「桂冠名誉指揮者」を兼ねるヘルベルト・ブロムシュテットさん（93歳）が最初にN響の第九の指揮をした時に（2）で説明したバリトン独唱の「このような音ではない！」つまり第1,2,3楽章の旋律ではないと否定する所から合唱が始まるのに、それを合唱団がステージでその演奏を聴いていないのは何事だと怒ったのです。それ以降、N響の第九はブロムシュテットさん以外の指揮者の場合でも必ず第1楽章から合唱団をステージに入れていきます。

(7) それでは県内のアマチュアによる第九もそうすべきか？・・・

第九倉吉公演に合唱団の一員として参加出演した事のある私の個人的な考えを述べさせていただきます。国内最高峰のN響の第九であれば（6）のブロムシュテットさんの言われる通りで良いと思いますが、地方のアマチュア合唱団・オケの

演奏はそれに拘る必要はないと思います。実際に倉吉公演の練習に参加してみると楽譜の最後にまとめてシラーの歌詞の日本語訳が載っているものの、合唱団員の半数以上はドイツ語の歌詞の上にカタカナで読み方を付けています。歌詞の意味を考える以前の段階であって本番の演奏もそのカタカナを読んで発声しているだけです。でも、アマチュアの演奏なのでそれでいいと私は思います。

また、第一楽章からステージに出されているとまばゆい程の照明にさらされながら、多くの聴衆が見つめる中で微動だにできないし勿論、鼻もほじくられません。この“さらし者状態”で歌が始まるまでの約 50 分間を耐えなければならぬのです。それと聴く方も別にドイツ人ではなくてバリバリの鳥取県人の方がほとんどで、意味が分からなくても目いっぱい声を張り上げた力づくの演奏に終了後は感動の涙を流す人も多くおられます・・・倉吉の第九はそれでいいじゃないですか・・・私は個人的にそう思います。日本には「言葉にならない言葉」とか「以心伝心」とか「目は口ほどにものを言う」などの奥ゆかしい文化があります。

そしてもう一つ、ベートーベンさんもブルームシュテットさんもそこまでは気づいておられないと思いますが、ステージに入場するまでの第 1 楽章と第 2 楽章の演奏の間、合唱団は壁で隔てられたステージ袖に控えています。雑然と小道具や舞台装置が置かれている暗いその場所で息を潜めながら壁越しに流れてくる演奏を聴いているのです。客席で聴くのととはまた違ったベートーベンの音楽をその暗闇の中で感じているのです。

(8) 私が大切にしている一枚の第九のレコードについて・・・

私が国内外で第九の演奏を実際にホール（オーデトリウム）で聴いたり、TVやラジオやCD、レコード等の媒体で鑑賞したりしてきました。多くの感銘を受けた演奏がありました。30代で名古屋支店に勤務していた頃、当時の名古屋市民会館で世界的指揮者 小澤征爾さんの指揮による名フィル（名古屋フィルハーモニー管弦楽団）の第九演奏を鑑賞しました。「これが同じ名フィルか！！」と天に飛び上がるくらい感動しました。この時、「オーケストラの演奏は指揮者で変わる」と強く思いました。水泳の北島康介の「超一気持ちイイ！」と似た様な感覚だったと思います。

時を遡って20代の東京本社勤務の時に秋葉原の石丸電気という7階建てのビル全部がレコードショップという店である第九のレコード（当時はまだCDは発売されていませんでした）を買いました。

ブルームシュテットさんの一代前のカペルマイスターのクルト・マズアの指揮、ライブチヒゲバントハウス管弦楽団、ライブチヒ放送合唱団、ペーター・シュライヤーとテーオアダムを含むソリストによる新装ゲバントハウスこけら

落としのための演奏でした。クルト・マズアの指揮はカールベームよりもロヴォルト フォン・マタチッチよりも動作が小さく手首をコロコロ動かすだけのものですが、そこから崇高で感動的な音楽が導き出されます。私個人の感想としてこのレコードの演奏が世界最高の第九の演奏だと思っています。ですから、この一枚は国内外どこに転勤しても大切に“肌身離さず”持っていました。

今回も話が長くなってしまいました。この館長報告を始めた時から申し上げていますが、このエッセイの部分は公民館活動と関係のない内容が多いので興味のない方は飛ばして読んで下さい。是非そうして下さいできれば嬉しいです。皆様、今回もお付き合い頂きありがとうございました。

以上

### <キャストイング>

(ソプラノ) エッダ・モーザ

(アルト) ローズマリー・ラング

(テノール) ペーター・シュライヤー

(バス) テーオ・アダム

(オルガン) マテアス・アイゼンベルク

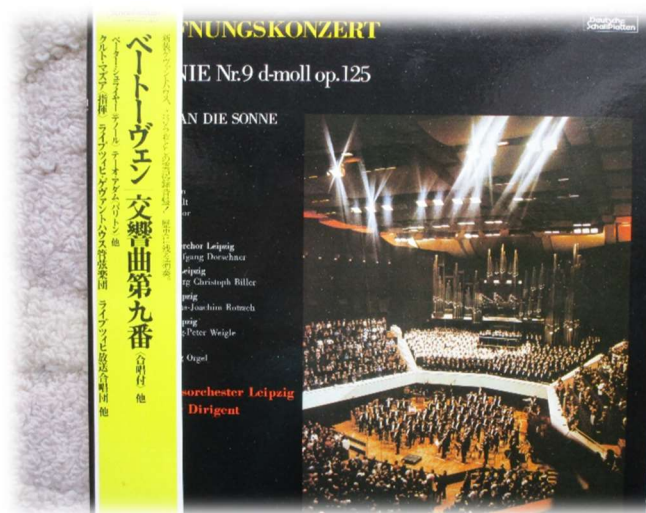
ライブチヒ・ゲバントハウス少年少女合唱団

ライブチヒ 聖トーマス教会合唱団

ライブチヒ 放送合唱団

クルト・マズア指揮

ライブチヒ・ゲバントハウス管弦楽団



<1981年10月8日 ライプチヒ・ゲバントハウス (ライブ録音) >

( Gewandhausorchester Leipzig )



巨匠 クルト・マズア

< Kurt Masur >

( Dirigent )